

『海』大阪商船株式会社 1932年

当財団の「アドミュージアム東京」に所蔵された、多彩な企業PR誌から

今回は大阪商船の『海』をピックアップ。どのように企業の個性を表し、時代を捉えているかを探る。

海の彼方への憧憬を 文章や写真で表す

大阪商船のPR誌『海』は、観光と貨物輸送の海運会社らしく世界に目を向け、“今”を伝えるフレッシュな雰囲気を持っています。

まず1932(昭和7)年1月1日発行の第29号を見てみましょう。

表紙は暁の空に向かって鶏が声を上げている正月らしい画です。画面下方はるか海上に商船が浮かんでいる構図が印象的です。

ページをめくると、最初に志どにい(シドニー)丸の船の写真が掲載され、「豪州シドニー港シドニー・ハーバー・ブリッジ下を通航中の我が社船志どにい丸」というキャプションが付いています。

次に、与謝野晶子の短歌「瀬戸の船路」。「紅丸にて」という題で4首。「董丸にて」という題で4首。〈船に居て心おどりぬ讃岐の灯彼より馳せてくるならねども〉から始まり、〈瀬戸の船飾磨高砂遠けれど雄鹿おがの小島のきりぎし光る〉まで、臨場感豊かな吟行歌です。

山崎南海雄、広瀬須賀児の「日華周遊

船は語る(一)」「香港の印象」は、台湾、香港、広東の旅のレポートです。初めて見た異国の地への驚きが子どものような率直な好奇心で語られ、この時代の日本人の海外への視線が伝わってきます。

布田虞花の「放送の放送」は、JOSK(ジャパン・オオサカ・ショウセン・カイシャ)によるJOBK(NHK大阪放送局)で放送された話の収録です。N先生として綴った「パナマ運河の話」はパナマ運河が開設されるまでの難工事の経緯など、興味深いエピソードを伝えます。そして自身がさんとす丸に乗船し、パナマ運河を通過したときの有様を記し、驚異の眼差しで隅々まで観察しています。神足徳三郎の「ブエノスアイレスの話」では、ぶえのすあいれす丸の船長が南米アルゼンチン共和国の首府ブエノスアイレスについて語っています。213万の人口、歴史、文化、市民気質、暮らし方、遊び、街の景観、文化施設、交通機関など南半球最大最高の文明都市について解説し、読者の理解を深めてくれます。

続く写真のページ、「りおで志やねろ(リオデジャネロ)丸・ラウンジにて」は豪華なサロンの様子がわかります。「船上よ

り」は、船の旅の楽しさを記録する記念写真集です。「うる丸にて、神戸より大連へ、大日本少年団満州慰問使一行」「りおで志やねろ丸にて、神戸より横浜へ、兵庫県立第一高女」など35枚の写真が掲載されています。船旅が一生の思い出になる大きな体験だったことを感じさせます。

小幡駿吉の「赤道祭風景」は、船客、船員合同の大仮装行列の様子を実況中継のようにレポートしています。滑稽でいかにも楽しい、しかし大事な船の祭礼。素人による手作りの創意工夫がおかしく、面白い。神戸を出て南シナ海よりシンガポールを経、インド洋に出てケープタウンを回って大西洋を越え、一路南米大陸を目指す「ぶえのすあいれす丸」が赤道を通過するにあたっての儀式なのです。

薬師川信一の「海の川柳」は、海の川柳を紹介しつつ、総体において川柳それ自体が鎖国的な江戸時代に発生しているだけあって、海国日本といった風の近代意識をその中に求めるのは難しいと記しています。

山下正樹の「福州への旅(四)」(G)福州電気公司)は訪問記です。この会社は電力会社として設立され、応用電気工業



1932(昭和7)年1月1日発行の第29号の表紙。そして本誌内の記事(一部抜粋)



1932(昭和7)年7月1日発行の第31号の表紙。そして本誌内の記事と広告(一部抜粋)



Yoshiro Okada

1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長などを経て98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』（電通）、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』（講談社）など。

を企画し、農村電化、製粉、米作、製氷、電気製作所など着々と事業を広げています。〈(H)「蜜柑の里」螺州郷行〉は素晴らしい螺州郷の様子をレポートします。中国文化の奥深さがわかります。大スケールの自然、山海の珍味を並べる中華料理、まさに圧倒的です。

船と旅をテーマに

「冬の船旅」は、歳末から年始にかけての数日を一家で暖かい南の国や温泉郷で過ごす船旅のプロモーション記事です。〈神詣で〉として、琴平詣で、宮島詣で、〈冬の温泉〉として、別府温泉、道後温泉、白浜と湯崎の船旅の詳細な案内をしています。

『海』にはPR誌に珍しく自社以外の広告がいくつも掲載されています。「高島屋写真部」「小西六大阪支店」「三菱倉庫」「三菱造船」「三越」「大丸」。そのほか「別府温泉」「湯崎白浜温泉協会」「道後温泉」などの旅館の広告も入っているのは当然かもしれません。これらの広告で『海』はいっそう、レジャーや旅の気分を駆りたてる効果を発揮しています。

1932(昭和7)年7月1日発行の第31号は、「夏号」で、表紙をモダンなデザインで表現した船で飾っています。曲線と直線。シンプルな画面と単純な色彩が新しい時代の空気を感じさせます。

「瀬戸内海モニターデユ」は、船旅の写真のモニタージュです。船に乗り込む客、船を見送るテープ、神戸の港、客船の内部(食堂・寝室・和室・広間)、デッキ、そして安芸の宮島浮き鳥居、屋島、須磨明石、四国集(栗林公園、琴平宮、多度津、今治、松山城、道後温泉)、瀬戸内海航路図解、客船の姿(すみれ丸、くれない丸、みどり丸、むらさき丸)、など8ページにわたるアル

バムです。

布田虞花の「瀬戸内海周遊対話」は、友人との対話の形で瀬戸内海周遊の理想的なプランを説明しています。軽妙な文章を読み進むうちに、この船旅がいかに魅力的に思えてきます。

「夏休みには満州へ」は、夏休みの満州旅行への誘いです。日程案、割引などを説明しています。

小川松雄の「安芸の国木ノ江港」は、瀬戸内海の歴史と今を語る中身の濃いエッセイです。塩澤憲一の「船に因んだ珍切手集」は、船がデザインされた各国の珍しい切手20種を紹介しています。

「懸賞・瀬戸内海・入選発表」は、『海』が全国の中等学校生から募集した瀬戸内海に関する文芸作品の入選作3篇を紹介。いずれも船旅、瀬戸内海の魅力を若

者らしく初々しく表現しています。

小幡駿吉の「船のABC」は、アルファベット26文字の順序で、A:アンカー、B:ブリッジ、C:キャプテン…という具合に、船に関する用語を簡潔に解説しています。教育的価値のある役に立つ内容になっています。

また藤田嗣治、マド夫人のぶえのすあ いれす丸乗船の文が自筆のデッサン(夫人の顔)とともに掲載されており、楽しい記事になっています。

『海』は、新しい産業である海運業のPR誌として、時代の息吹を読者に運んでいました。アジアから北南米、アフリカ航路まで、世界中にネットワークを開拓し、当時、世界有数の海運業にまで成長した企業の姿だけでなく、海洋国家としての日本を伝えるPR誌に違いありません。

Company Profile

瀬戸内から世界の海運をリードした大阪商船



1932(昭和7)年10月1日発行の第34号(左)と
1935(昭和10)1月1日発行の第41号(右)の表紙

